



IGC

No.14

事務局ニュース

第29回IGC事務局

電話：0298-54-3627
ファックス：0298-54-3629

第28回 ワシントン IGC の総決算

来日した前事務総長 Hanshaw 氏を囲んで

11月12日から約1週間にわたり、第28回ワシントンIGCの事務総長だった Bruce B. HANSHAW 氏が、ワシントン会議の総括と次回京都会議との事務連絡のため、筑波・京都を訪問されました。事務局では14日、佐藤組織委員長を交え、貴重な前大会の経験を膝を交えてたっぷり聞く機会を得ました(写真1)。最終報告に相当する General Proceedings と HANSHAW 氏の話から、これまで明らかにされていなかったワシントン会議の教訓を以下に拾ってみました。

<アンケート回答の評価は慎重に>

ワシントン会議の実際の参加者は結局 6,044 名と記録されました。その内訳は右の表のとおりです。これを見るとファースト・サーキュラーのアンケート回答と実際の参加者との関係についての興味ある結果が読みとれます。

たとえばアンケート集計時(1987年9月—回答締切は同年5月だった)の参加希望者より実際に参加した人数の方がどういふわけか多くなっています。一方、同伴者や子供はアンケートの約1割しか来なかったことがわかります。さらに、プレ巡検については実に1割強、ポスト巡検でも2.5割しか参加しませんでした。ただし、会期中の巡検は人気が高く、7割弱の人が参加しました。これらについて HANSHAW 氏は、一般に巡検の経費が高いためか、あるいは地球科学がフィールド中心からラボ指向に変わりつつあるためではないか、などと分析していました。

項目	アンケート回答数	実際の参加数
参加者総数	5,018人	6,044人
同伴者	2,496	399
子供	757	85
米国人	2,150	2,966
米国人以外	2,868	2,679
プレ巡検	1,571	208
会期中巡検	998	670
ポスト巡検	1,607	398
ワークショップ	1,955	197
ショートコース	2,731	324



写真1：HANSHAW 氏を囲んで(氏の右隣りから順に、佐藤 正組織委員長、本座栄一事務局長、石原舜三事務総長、遠藤祐二、有田正史、倉沢一、小玉喜三事務局長；11月14日地質調査所にて)

<地質屋は宿さがしの名人?>

組織委員会は事前に10のホテルと契約し2,850室をリザーブしたそうですが、実際にはピーク時でも1,800室が使われたにすぎないと報告されています。多くの人が相部屋に泊まり、知人宅を利用したからだと HANSHAW 氏は述べていました。実際ワシントンにある彼の自宅には、常時4人、彼の友人の自宅にも多くの参加者が滞在したという事です。一家に3~4のベッドルームが常識的で、簡単に客を泊める習慣のアメリカならではのかもしれませんが、さて京都の場合はどうなるでしょうか。

<ジオホスト選考は公平に>

ジオホストの最終選考会議は8人の委員で行なわれました。すなわちスリランカの Dr. P. G. COORAY (AGID)、ナイジェリアの Dr.

C. A. KOGBE (IUGS), カナダの Dr. A. R. BERGER (IUGS), チェコスロバキアの Dr. V. STBRAVA (Unesco), ソ連の Dr. N. BOGDANOV (27thIGC), 米国の Dr. B. HANSHAW (28thIGC), そしてジオホスト委員会の Dr. Prof. HELTZ の各氏です。彼らは1988年9月15日までに提出された応募者395人(49ヶ国)について、年齢、提出されたペーパーの質、それまでの公表物等を事前審査し、2日間の会議で選考したということです。その結果、最終的には75名(43ヶ国)がジオホストとして補助を受けて参加することができました。できるだけ多くの国からまんべんなく選んだ苦勞が読み取れます。

なお、これとは別に発展途上国から参加した35歳以下の若手研究者3人に、今回新たに設けられたHutchinson Young Scientist 賞が授与されました。これらの援助体制は、特に発展途上国の研究者を励ます重要な意義があったので、29thIGCでも実施されることを期待すると述べていました。

<IGC はやはり地質学「会議」>

期間中9日間に大小121のビジネス・ミーティングが

会場あるいは周囲のホテルで開かれたと報告されています。実に1日平均13~14という数です。これもIGCの重要な目的だとは思いますが、さて京都の場合どれだけ対応できるか、心配の種になりそうです。

<収支決算は黒字？>

28thIGCの最終会計報告によると、収入は387.6万ドル(5億388万円(130円/米ドルとして))、支出は353.8万ドル(4億5994万円)、差引き33.8万ドル(4,394万円)の黒字であったと報告されています。その内訳は下表のとおりです。

参加人数の規模の割りにはコンパクトな会計になっているという感じですが、地質調査所の職員が巡検の下見に行った時の経費や、政府扱い郵便・電話代、秘書経費等、実際には国と地質調査所が負担したいいわゆる「サイレント」な経費も含めると、おそらく膨大な額になるだろうと報告されています。体制が違うので、一概にわが国と比較することはできませんが、石原事務総長も頭を抱える情景がありました。

第1表 第28回 IGC (ワシントン) の収支一欄

{収入}		{支出}	
登録料		給与・給付金(AAPGに)	\$198,082
一般・学生参加者	\$935,373	管理費(主としてAAPGに)	199,785
非参加登録者	9,725	非常勤人件費(受付・ガード他)	178,318
同伴者	47,405	事務経費	2,180
巡検	551,656	電話・テレックス代	14,043
近郊巡検	34,331	計算機使用料	16,955
ショートコース、ワークショップ	83,483	クレジット・カード委託金	22,572
ユース・コンGRESS	3,410	保険金・保証金	60,762
教育展示	150,985	印刷費(サーキュラー他)	559,120
技術展示	267,162	郵送料	240,624
寄付金・補助金		委員会会議費・旅費	863,597
米国地質調査所補助金	200,000	イベント経費(食費・出演料)	267,124
その他の政府補助金	909,848	市内バスチャーター代等	112,643
特定補助金	13,200	広告料・展示場費	7,994
寄付金	379,482	借料・ビルサービス費	101,076
間接収入		調度・設備・看板等	171,695
米国地質調査所旅費	102,141	視聴覚設備・サービス	194,968
米国内委員会(地質)	39,524	登録/巡検バック、記念品	180,278
利息	110,743	法律顧問・会計士	42,243
広告料	18,640	コンサルテング・契約サービス	24,234
雑収入		ニュース通信サービス料金	8,470
記念品売上	6,630	海外バイヤー案内(米商務省へ)	3,500
旅行損料	(2,881)	スミソニアン火山展示代	10,000
ドミトリ部屋代	10,053	ジオホスト費用	51,383
その他	5,597	その他	6,450
合計収入	3,876,507	合計支出	3,538,096
剰余金	338,411		